課題「雨」

「きみは冒険者」

人物

藤矢純平（12）小学六年生

佐久間清子（12）純平の幼なじみ

高橋亮人（12）純平のクラスメイト

羽田賢太（12）純平のクラスメイト

藤矢佐恵（37）純平の母親

その他

○高層マンション・外観（朝）
薄暗い空模様。大雨が降っている。
○同・藤矢家の部屋・中（朝）
リビング。バルコニーへ出るガラス戸の前でしかめっ面で、雨降る空を睨んでいる藤矢順平（12）。ガラス度のカーテンレールには三つのてるてる坊主が吊されている。
リビングに入ってくる、スーツ姿の藤矢佐恵（37）。
佐恵「空睨んでも晴れないわよ、純平。早く学校の準備しなさい」
部屋の掛け時計を見る佐恵。時間は七時四十五分。
インターホンが鳴る音。
佐恵「ほら、来たわよ」
佐恵、室内インターホンのスピーカーまで行き
佐恵「どうぞ」

ぶすっとしたままの純平。
リビングにやってくるランドセルを背負った佐久間清子（12）
清子「お邪魔します」
佐恵「ごめんね、清子ちゃん。純平まだ準備できてなくて。先に行ってくれていいわよ」
清子「いえ。そうだろうとは思ったので」
清子、純平を見て呆れた表情。
佐恵「いつもごめんね。じゃあちょっと遅刻気味だから、おばさんもう出るわ。純平っ、いい加減にしなさいよ」
リビングを出ていく佐恵。
恨めしそうにガラス戸越しに空を見ている純平。
清子、純平に歩み寄って
清子「まだ中止って決まったわけじゃないでしょ」
純平「天気予報じゃもうずっと雨だよ」
清子「いずれにせよ、明日の話。私も遅刻するから早く準備して」

純平、重い腰を上げて自室へ向かう。
清子、その背中を見ながら壁に張ってあったカレンダーを見る。
六月のカレンダー。２５日は丸が付けられ、遠足と大きく書かれている。

○興禅寺小学校・外観（朝）
傘を差した児童が登校してきている。

○同・教室・中（朝）
教室に入ってくる純平と清子。それぞれ何も言わず自分の席に向かう。
純平、自分の席に座ってため息。
やってくる高橋亮人（１２）と羽田賢太（１２）。

亮人「今日も夫婦登校か、純平」
賢太「ヒューヒュー」
純平「そ、そんなんじゃないよ。幼なじみなだけで」
亮人「わかったわかった。みんなわかってる

って」

純平、ほっとする。

亮人「夫婦だってことが」

純平「亮人くんっ」

賢太「そんなことよりさ、この前話したこと実行するぞ」

純平「え？」

首を傾げる純平。

亮人、小声で

亮人「忘れたのかよ。明日の遠足中止だったら学校サボって市村自然公園行くって」

純平「あれ本気だったの？」

亮人「当たり前だろ。２回延期になって明日無理なら中止。それで明日の降水確率は？」

純平「百パーセント、だったけど」

亮人「だろ？　お前の母ちゃん、いつも先に仕事出るんだから。余裕じゃん」

純平「でも清ちゃんにはバレちゃうもん」

亮人「そこだよ。佐久間にバレたらあいつ絶対に先生にチクるぞ。なんとかしろ。出来

ないならお前はメンバーから外す」

純平「それは、嫌だよ……」

亮人「集合は八時。この前教えた場所だ。頼むぜ」

賢太「お前も来ないとつまんないからな」

それぞれ純平の肩を叩いて、去っていく亮人と賢太。

純平、自分の肩に手を触れながら悩んでいる様子。

その様子を離れた席から見ている清子。

○同・教室・中

チャイムが鳴る音。それぞれが帰り仕度をしている。

純平、帰り仕度をしながら、憂鬱気味に窓の外を見つめる。外は依然として雨が降っている。

○道

雨の中、俯きながら帰っている純平。

その表情は暗い。

清子の声「純平」

驚いて顔をあげる純平。

そこには清子が立っている。

純平、戸惑った顔で

純平「清ちゃん……」

清子「なにそのやばい奴に会っちゃった、みたいな顔」

純平「いや、だって帰りはいつも遠藤さんとかと帰るから……なんでかなぁて」

沈黙する、純平と清子。

清子「帰ろうよ」

純平「……うん」

並んで歩いている純平と清子。沈黙が続いている。

清子「やめておきなよ」

純平「え？」

清子、前を向きながら淡々と

清子「どうせ学校サボって遠足の真似事する気でしょ。場所は、市村自然公園とかじゃ

ない？」

純平、脚を止めて驚愕する。

純平「なんで場所まで……」

清子、純平より少し先を進んでから振り返る。

清子「高橋とかが考えそうなことだよ。というか男子が単純なだけか。場所はお金を使わずにそれなりに遠くて雨でも遊べる場所って言ったらあそこくらいでしょ」

純平、声を失っている。

清子「すぐにバレるよ。怒られる割にはそんなに楽しくないと思うし。純平は多分、罪悪感の方が勝っちゃうと思うから」

純平、俯きながら

純平「でも、行きたいんだ」

清子「……昔から外で男の子と遊ぶより私と人形遊びする方が多かったじゃない。屋外は好きじゃないでしょ」

純平「そ、それ他の人には言ってないよね」

清子「言ってないよ」

純平、拳を握り締めて俯いている。
清子、それを見て独り言のように
清子「男子なんだね。意外と」
純平「え？」
清子、純平を鋭い目線で見て
清子「また、明日ね」
去って行く清子。
純平、清子の背中をじっと見つめている。

○マンション・藤矢家の部屋・中（朝）
リビング。出かける準備をしている佐恵。
朝ご飯を食べている純平。
佐恵「今日、残念だったわね。遠足」
純平「……うん」
窓の外を見る、純平。外は変わらずに雨が降っている。てるてる坊主の数が昨日よりも増えて五つになっている。
佐恵「梅雨の時期は仕方ないかもね。今度、

清ちゃんの家族とお出掛けしましょうか」
純平「……うん」
佐恵、純平を気遣いながら
佐恵「清ちゃん、もうすぐ来ると思うから、
その前には準備しておくのよ」
純平「わかってる」
佐恵「じゃあ行ってくるわね」
リビングを出ていく佐恵。
純平、急いで朝食を食べ終わると立ち
上がる。自室からランドセルではなく
リュックを持って出てくる純平。
純平「行くんだ……」
リュックを見つめて力強く握っている
純平。だが、その顔はどこか不安そう。
純平、ふと時計を見ると時刻は七時五
十分。
純平「やばい。もう出ないと間に合わな」
はっとする、純平。
玄関の方を見るが、誰かが来る様子は
ない。

純平「清ちゃん」

純平、決心したようにリュックを背負う

○マンション前（朝）

雨の中、マンションから出て来る清子。

一度、マンションを振り返るもため息をついてまた歩き出す。

○道（朝）

リュックを背負い、楽しげに走っている純平。

遠目に亮人と賢太の姿を見つけて手を振る。

手を振り返している亮人と賢太。

天気は雨だが雲の切れ間から僅かに日の明かりが差し込み、純平の進む道を照らしている。

純平、一度空を見上げて笑いながらジャンプする。